

シンポジウム／語りと伝説―三河の浄瑠璃姫伝承―

## 浄瑠璃姫をめぐる近世唱導

堤 邦彦

(一)

時代小説が史実の虚構化を作品の生命とし、「戦国」もののゲームソフトが武将たちの逸話を語りつくす。現代の表現文化と「歴史」の関係性を想起するとき、いわゆる歴史ものの創作は過去の出来事の語り手という点において均質である。あるいはそれらは、程度の差こそあれ、作品の根底に由来性を内包する一群といってもよからう。

一方、寺社縁起もまた、大方の場合、史実もしくは史実らしく見える事柄を話の拠り所とする由来語りのスタイルをとることが少なくない。ただし、縁起の世界では、語りの目的はあくまでも宗門宗派の教線拡大を志向するのが常であり、その点からいえば口承文芸をはじめとする他領域の語りには見られない、あからさまな布法の意図と民衆教化の色合いを鮮明にしている。いわばそれは宗教営為の言語化でもあるわけだ。

唱導者のスタンスから歴史上の英傑や宗祖高僧の行実を縁起の素材に援用したためしは、むしろ古代・中世の宗教説話に珍らしくない。だが、説話の量的な増大と、人々の俗耳に入り易い平明通俗な語り口にこだわるなら、十七世紀以後に顕在化する庶民仏教の唱導営為は明らかに際だっている。とりわけ民衆の寺社参詣が隆盛をさわめた近世後期の社会にあつては、芝居・小説・浮世絵などで知られた源平争乱の英雄伝説や、彼らの旧跡、遺品にからめた堂宇開創譚、本尊・宝物の由来などが寺宝の開帳をともなう頻繁に口誦され、あるいは印刷されて略縁起のかたちで大量に伝播して行つた。そのような状況は、たとえば源義経、静御前、平敦盛といった悲劇的な英雄像と個々の寺社縁起とのかかわりを見れば容易に想像できるだろう。<sup>(1)</sup>

さて、伝承の人物像の唱導話材化という意味では、愛知県岡崎市の寺院によって布宣された浄瑠璃姫伝説の場合も、同時代的な縁起語りの特徴をよくあらわしている。市内諸寺に伝わる縁起書や霊宝物の詳細については、石田茂作氏『浄瑠璃姫の古蹟と伝説』<sup>(2)</sup>をはじめ、磯沼重治氏の調査に委曲がつけられている。また近年では、三河武士のやかた家康館発刊の特別展図録『岡崎の説話―浄瑠璃姫』<sup>(二〇〇二)</sup>により伝承地、関係資料の全容を知ることができる。本稿では近世後期の縁起布宣のありようを中心に、寺院所伝の浄瑠璃姫伝説の同時代的な意味を再検討してみたい。

東海道矢作宿に程近い遺跡寺院のなかで、著名な伝承地をあ

げるとすれば、次の三ヶ寺であろう。

A 光明院浄瑠璃寺（真言宗醍醐派、岡崎市康生西）

B 成就院（曹洞宗、同吹矢町）

C 慶念山誓願寺（時宗、矢作町）

Aの浄瑠璃寺は宝暦十二年（一七六二）十月七日再写の卷子本縁起『瑠璃光山安西寺薬師縁起』（一卷）を所蔵し、寺宝に浄瑠璃姫と義経の掛福画（各一幅、近世前期成立）がある。また、Bの成就院は浄瑠璃姫が身を投じたと伝える淵瀬（浄瑠璃淵）の河岸に位置し、境内裏手の供養塔を伝説のあかしとする。天明二年（一七八二）、菅江真澄の発願により浄瑠璃姫の六百年忌を執り行ったのもこの寺である。

A・Bの寺院は、宗派・寺歴は違っても浄瑠璃姫伝説の故地を主張する点で、歴史伝承の縁起化をよくあらわしている。もともと戦災、水害等で失われた宝物、資料も少なくないため、かつての布教の実状をつぶさに知るてがかりは必ずしも十分でない。

これに対してCの誓願寺の場合は、写本の卷子本縁起、略縁起を刷り出した板木、姫・侍女らの墓碑、宝物遺品の類を多数所蔵しており、さらに各地の図書館、研究機関に異版の略縁起が散在するといった状況にある。それらの伝存資料にもとづき、東海道を行き交う旅人や参拝者を前にした縁起語りの生の姿を立体的に復元しうる興味深い事例といえるだろう。誓願寺の唱導僧は、それではいつたい伝説の旧跡たる自坊の由来を説くこ

とでいかなる宗教メッセージを伝えようとしたのであろうか。あるいは、伝説の布宣は寺の教線伸長策とどうかかわるのか。誓願寺関与の縁起資料を読み解くことにより、そのあたりの事情を探ってみたい。

## （二）

慶念山誓願寺の開創は長徳三年（九九七）、恵心僧都が、溺死した僧・慶念の鎮魂弔祭のために建てた草堂を濫觴とする。鎌倉期に天台宗より時宗に転じて以来、中世末の兵火を経て衰退の時期もあった。しかし、近世に至って再び教勢をとりもどし、矢作宿の有力寺院に名を連ねた。本尊阿弥陀如来はもとより、境内の堂宇に安置の十王像、地藏尊像（伝恵心作）に庶民の信仰があつまり、戦前までは岡崎市安養院の浄土宗僧によって十王図の絵解きが行われたという。<sup>4</sup>十六、七世紀以降に民間に浸透した十王信仰や女人救済の思想を背景として、浄瑠璃姫の悲恋話が寺の開創縁起に組み込まれ、そして鎮魂の物語を浄土信仰にからめて勸化したのであろう。

門前に建つ宝暦八年（一七五八）に建碑の「浄瑠璃姫菩提所」碑文によれば、寿永三年三月、義経との別れを悲しんだ兼高長者の姫・浄瑠璃姫は、管生川に身を沈めた。長者は姫の遺骸を埋葬し十王堂を建てて菩提を弔ったという。

いまでも十王堂の脇に室町期のものとみられる姫の墓（五輪塔）<sup>5</sup>

があり、二人の木像、掛福画、姿見の鏡、義経所持の薄墨の笛などの寺宝とともに、伝説の由来をつづる四種の縁起資料が伝わる。

ひとまずこの四種を写本系と略縁起の板木に分けて書誌データを紹介し、それぞれの内容上の特色について述べてみたい。

〈写本〉

①『慶念山誓願寺縁起』（卷子本・一卷）

・奥書に「寛永三年／丙寅三月上旬 改書之」とある。縁起の前半の「子安延命地藏大菩薩縁譚」は慶念の怨霊を鎮めるために造立された地藏尊像の霊験と利益。後半に「縁記」と題して、義経の生涯、姫との出会いと別れ、管生川入水、十王堂建立などの浄瑠璃姫伝説をしるす。

②無題卷子本・一卷

・書写年未詳。「源義経公略縁起」「浄瑠璃姫御前略縁起」の二篇よりなる。

①の二種の縁起はともに前掲磯沼論文に翻刻されており、全貌をうかがうことができる。「子安延命地藏大菩薩縁譚」は、小堂に安置された地藏尊像の得益を称揚したもので冒頭に、入水した慶念坊の霊魂得脱と、恵心僧都による長徳三年の寺堂建立譚を載せる。

一方、①の後半部分を占める「縁起」の本文を類比してみると、これもまた浄瑠璃姫伝説の記述に入る前に「子安延命地藏大菩薩縁譚」とほぼ同内容の怨霊譚を載せる。

当山の根元は往昔此処<sup>二</sup>池有て慶念と云し僧ハ如何なる故にや入水せしとなん。夫より此方慶念が淵と呼伝ふ。其靈魂夜毎に出、人民神を痛しむ。茲<sup>二</sup>人皇六十六代一條院御宇長徳<sup>二</sup>丙寅、彼池を埋、平地に成し、成仏得脱の為に恵心僧都千体の地藏菩薩を作り、一字建立し給ひ慶念山誓願寺と号霊場也。

もつともここでは誓願寺の開創を長徳二年としており、縁起の最重要記述である開創年号に何故か誤差が生じている。

かような説話内容の重複と開創年号の不統一は、①がもともと成立の異なる二つの縁起書を再写の折に合一した写本であることを示唆するのではあるまいか。

奥書に寛永三年（一六二六）の年号を明記してはいるものの、前半・後半の整合性の無さをみるかぎり、二種の縁起書を取り合わせて写したものと考えるのが自然であろう。ことによると「寛永」の年号じたいが、原本からの再写かもしれない。また次に述べるように、比較的新しい時代の縁起とおぼしき②の筆跡と、①のそれが同筆であることは、①が再写本である裏付けとなる。結論を急げば、①は近世末から近代初頭の書写による伝本ではないだろうか。

①および②をして寛永よりはるか後代の縁起書とみなしうる根拠のひとつは、縁起の記述そのものにある。たとえば①には、寺宝の義経像、浄瑠璃姫像をめぐる現世利益信仰と拝礼の勧めが繰り返しつづられている。その一部を左に引いてみよう。

終ニハ蝦夷嶋之御渡り有て彼国を治め給ひ義経大明神と尊敬奉る。一度此尊像体を拝し奉ル結縁輩、劔難盜難別て無実の災難をのがれ開運長久守<sup>ラ</sup>せ給ふとの御誓願也。又淨り御前、一度拝し結縁し奉る輩、男女縁談愛敬感想あらせらる、事、諸人能知る所也。

目の前の尊像（モノ）と悲恋入水の物語（コト）がものごとの融合し、寺僧の説きひろめる招福除災のもろもろの得益（劔難、盜難除け、無実の罪の防除、開運長久、そして縁結びなど）を尊像結縁の善男善女に約束する。そのような現世利益の思想を淨瑠璃姫縁起の中心点にすえて語ることは、十八〜十九世紀に登場する誓願寺版の略縁起（後出③④）に顕著な当代的宗風のあらわれであった。近世略縁起をめぐるそのような時代特性にかんがみるなら、①の卷子本の「寛永」書写はやや時代が早すぎるように思えてならない。

ちなみに②の縁起は、兩人尊像の利益に限定した小振りのコンパクトな記述内容であり、寺宝開帳や縁日の折に朗誦される「読み縁起」の一種と見なしうる。尊像拝礼の効能は①とほぼ同じであるものの、細部にこだわっていえば、新たに「水難」除けの利益を追補しているのが目に付く、それはいわば、得益の増殖ともいべき現象にほかならない。すなわち「淨瑠璃御前縁起」の末尾は

殊ニ水難のうれいをまぬがれさせ給ふとの御誓ひなれば各謹で拝礼遂げられませう。

のごとく結ばれるのであった。開創の当初より「慶念淵」の怨霊譚を語っていた誓願寺縁起が、のちに淨瑠璃姫入水の伝承と深く結び付き、さらには近世後期の衆庶に支持された利益信仰の流行色を反映しつつ、「水難のうれい」を退ける靈験あらたかな尊像奉讃の信仰へと変遷したのであろう。

### (三)

さて、寺宝と一体化して語られる現世利益の強調は、次の③④の略縁起にいっそう明確な布法の意図をあらわしている。誓願寺には、かつて略縁起の板行に用いられた二種の板木が残されている。両者の書誌データを示す。

〈略縁起板木〉

②『義経公淨瑠璃姫略縁起』

・板木一枚、全二十五行

・本文中に「延享三丙寅まで七百五十年」とあり延享三年（一七四六）以前の印刻と推測される。

④『淨瑠璃御前菩提所略縁起』

・板木八枚

・本文末尾に

寿永二癸卯年三月十二日

本性院殿淨瑠璃姫弘雲医誓法女

安政二乙卯年迄六百七十二年ニ成ル

誓願  
寺

東海道三州碧海郡矢作里

十王堂 ㊦

とあり、安政二年（一八五五）の印刻とわかる。

③は一枚刷りの形態から考えて、宝物開帳の折りに配布された略縁起ではなかったか。本文中に義経・姫の尊像の利益にふれて、

此ノ尊像ヲ一度拜礼結願シ奉ル輩ハ男女縁談諸人愛敬諸芸㊦

進ヲナサシメ、及ビ水火盜難難病等ヲ守護シ

云々とあり、卷子本縁起と同様に、寺に詣でて尊像を拜する「結縁の功德」に筆をさくのである。

また③の内題下に「境内ニ浄瑠璃姫石塔アリ／左右ニ侍女標石塔アリ」という注記がみえ、奥付部分には

東海道三州矢作 慶念山誓願寺

浄るり姫菩提所

義経公御祈願道場

とあって、姫の墓所としての遺蹟性を主張し、伝説の故地たることを世俗に勧化する寺側の布法戦略を端的にものがたっている。③の略縁起が刷られた延享三年からさほど遠くない宝暦八年（一七五八）十月十五日、東海道沿いの門前に「浄るり姫菩提所」の石碑が設けられたのは、その当時、宗教名所の聖性を宣伝しつづつあった誓願寺の唱導活動と無縁ではあるまい。石碑

の台座に刻された「義経像／じやうるり／ごぜん像／并／石塔」の文言に、われわれは寺宝の霊徳を声高に説きひろめ、街道往來の旅人を境内の旧蹟にいざなう伝承名所・誓願寺の弘法姿勢を垣間見ることができよう。

略縁起をとおして明らかになる浄瑠璃姫伝説の名所化とゆかりの遺宝の開帳、そして伝説の代弁者ともいふべき個々の宝物が放つ「歴史」のリアリティーと現世利益信仰の融合——。これらの要素を立体化する唱導の方法は④の安政版略縁起に至り、なおいっそ明確な傾向性を示すこととなる。すなわち、④は「当山の宝物」となって「今に伝來」した義経公所持の「薄墨の笛」の由緒をつまびらかにし、「浄るり淵」の古跡に言いおよびながら、尊像結縁の功德を並べたてたことに力をそそぐのであった。それらはまさしく周到に用意された縁起語りの常套的な口吻ともいえるものであった。

なお、④と同版の日本大学総合学術センター・黒川文庫蔵本にひき比べてみると、さらに凝った庶民勧化の仕掛けが工夫されているのがわかる。黒川文庫本の場合には、まず表紙裏の見返しに地藏尊像や義経、姫の木像はもとより、薄墨の笛、姿見の鏡などの宝物を列挙して示し、寺参りの人々の好奇心に訴えかける。その一方で、巻末に「四十二歳厄除之秘法」なる呪法指南を付載し、浄瑠璃姫伝説と直接関係のない呪歌の知識を紹介する。周知の伝説に依拠しつつも、他方では自坊を発信源とする招福除災の庶民化導に傾斜して行った幕末期誓願寺の唱導

のありようを如実にものがたる事例といえるだろう。

もつとも、興味深いことに、現世利益の布宣に走るかような宗風は、当初から誓願寺縁起を特徴付けるものではなかったようだ。国会図書館蔵の享保十七年（一七三二）版略縁起「じやうりごぜんゑんぎ」<sup>(7)</sup>には、利益信仰の性格を強める以前の誓願寺と伝説の関係が見えかくれする。すなわち享保版の場合、「浄るり淵」や義経像の安置についてはふれるものの、浄瑠璃姫の尊像に言及せず、また寺宝の利益をめぐる記述が見当たらない。本文末尾に、兵火を受けて十王堂の千体地藏以外ことごとく焼亡した諸堂が再興され、「当年尊容幾成就し畢ぬ」とあるところから、誓願寺の寺勢復興を記念した略縁起であることは間違いない。おそらくは、享保版から幕末期略縁起への変遷過程で衆庶に親しみ易い現世利益の要素が時を経るごとに付け加えられ、浄瑠璃姫伝説の古層に積み重ねられて行ったのであろう。

十八世紀なかばを境として、浄土宗系諸流（ことに鎮西白旗派）や日蓮宗のあいだに寺宝の霊徳と目の前の宝物の利益を説いて参詣人を化導する近世庶民仏教の勸化の定型が確立し、人々の日常的な信仰生活に根をはるようになって行った。本稿に取りあげた誓願寺縁起の変容もまた、当代唱導界のそのような動向を反映したものとみて、大きくあやまつまい。

注

- (1) たとえば敦盛伝承について論じた佐谷真木人氏『平家物語から浄瑠璃へ』（二〇〇二、慶應義塾大学出版会）第一部「平敦盛像の成立と展開」。また義経と静御前にまつわる略縁起としては、茨城県古河市・光了寺（真宗）の『静女蛙蟻竜舞衣略縁起』（中野猛氏編『略縁起集成』2所収）などがある。
  - (2) 一九六九年、至文堂。
  - (3) 磯沼重治氏「岡崎市誓願寺蔵浄瑠璃姫関係資料」（『伝承文学研究』26、一九八一・九）。
  - (4) 注3の磯沼論文参照。
  - (5) 『新編 岡崎市史』第二卷（一九八九）四九八頁。
  - (6) 『略縁起集成』2所収（一九九六、勉誠社）。
  - (7) 注6に同じ。内題は「浄瑠璃御前菩提所略縁起」。
  - (8) 堤邦彦『江戸の高僧伝説』（二〇〇八、三弥井書店）第二編「近世浄土僧の民衆教化」。
- （つつみ・くにひこ／京都精華大学）